関西自然保護機構会報 *20*（*2*）：*57－58, 1998*

巻 頭 言

自然保護と博物館

KONC会長・京都橘女子大学 千 地 万 造

博物館の機能には調査研究，資料の収集保管，展示と普及教育，情報発信等々がある。博物館はその機能を通じて自然保護にいかに関わり，いかなる役割を果たすべきか，かなり乱暴な論旨となることは承知の上で，いま一度考えてみたい。

地域自然史（誌）研究・資料収集保管のために

20世紀におけるわが国の生物学発展の流れを一門外漢の筆者が云々するのはおこがましいと思うが一前・中・後の3期に分けてごく大ざっぱにみると，前期（30年代まで）は生物分類学が主流であった。研究は主として大学において行われ，それに伴って地域自然誌の調査も大学の研究者によってなされてきた。当然のことながら資料は大学の関係学部・教室の標本室に蓄積されてきた。

次の中期（30年代～50年代）は大学的研究は実験的な生理学や遺伝学分野の研究に比重が移っていった時代である。分類学に必要な資料収集のための地域自然誌の調査研究は生態学的調査研究へと移行した。50年代末期になって，わが国にも小規模ながら地域博物館が造られるようになった。これまで大学でなされてきた分類学的研究と，地域の自然資料の蓄積・保管は博物館が担うべきだという声が聞かれるようになったのもこの時期である。地質学の分野では地域地質誌の調査研究を主流としながら，物理地質学的研究や理論的研究が次第に目立つようになった。またこの時期，わが国で自然保護が唱えられるようになった。はじめのうちは「日本の美しい景観を守れ」という，景観論的な自然保護主張であったが，生態学の発展が自然保護論の科学的・理論的基盤となった。

後期（60年代～90年代）はわが国にとっても，また世界的にも激動の時期であった。60年代からは高度経済成長政策がとられ，わが国の経済は急激な発展段階に入り，何度かのオイルショックによる不況に見舞われもしたが，80年代末頃には世界の経済大国といわれるまでに至った。

大学の生物学研究では分子生物学が盛んになり，生態学も地球規模にフィールドを拡げていった。地質学分野でも海洋地質学における深海掘削計画やプレートテクトニクス論にみられるようにビッグサイエンスの時代となり，国際的なプロジェクトが盛んに行われるようになった。私がかかわってきた国際地質対比計画（IGCP）も，これまでの地域地質誌的研究の時代的要請に沿った発展形態の一つであろう。

大学的研究がこのようにグローバル思考と複合科学的・学際的発展の道をたどっていることについては地球自然認識の上で重要なことだと思う。しかし一方，地域自然史（誌）の調査研究も地球自然の認識，人と自然の共生に不可欠ではないか。そうとすれば，博物館はかつて大学の生物学や地質学関連の教室（institution）がそうであった自然史（誌）の調査研究と，資料の収集保管のセンターとしての役割を果たさなければならない（分類学的研究ももちろん含まれる）。

自然との共生をみんなのものにするために

わが国では60年代後半以降の好調な経済的基盤の上に，博物館が各地で作られてきた。一方，われわれの身の回りでは各種の公害が顕在化した。自然破壊は世界的に拡がり，地球環境の悪化をいかにして防ぐかが21世紀の最大の課題となった。そしていま，バブルに踊ったわが国の経済はその付けの大きさと重さに喘いでいる。かつて自然保護を唱えていたような人や，自然愛好者と自称していた人までもが景気の回復がとりあえず重要課題だと言うようになった。

しかし一方，長良川河口堰反対のねばり強い活動，名古屋港藤前干潟埋め立て地の撤回，神戸空港建設問題や，吉野川第十堰問題での住民投票請求署名等々自然保護にかかわる世論の根強さに勇気づけられる。地球温暖化，オゾン層の破壊，砂漠化，環境ホルモン等々，いずれも避けて通ることのできない重要課題である。ただその根底に自然破壊があることを，理屈だけでなく人それぞれの地域の実体を通して体得し，自然保護への情熱と行動を持続することが求められる。そのために，博物館は大学でなされているようなグローバルな視点からのアプローチではなく，地域の自然を通して地球自然が見えるような展示や，生涯学習プログラムを実践しなければならないと思う。

そのための若手研究者の養成もまた大学教育に課せられたか大切な課題だと思う。微々たる額ではあるが，20年余り続けてきたKONCの研究助成もそのための貧者の一燈として評価されてよいと思う。地球の内部構造やマントル物質の運動モデルを云々できても，あるいは，生物進化の新しい理論を云々できても，地域の地質図も作れない，フィールドワークによって地史も読みとることができないような地質学者は地域博物館の学芸員として不向きである。南太平洋のクジラの生態には詳しいが，地域に生息するシカやタヌキの生態は知ろうとしない動物学者，アマゾンの熱帯雨林調査には情熱を燃やしても，地域の森林には興味を持たない植物学者も同じである。

博物館の展示でも，同じことがいえる。地球生物史，地球生物地理，地球構造発達史等々，教科書の写真・図版を実物標本化した展示に金をかけて立派なものにする風潮がある。それはそれで地球自然の理解につながるだろうが，全国各地に同じような展示の博物館ができてよいものだろうか。お互いに特徴を出そうとしても基本的な展示のコンセプトが同じだから特徴のだしようがない。他館にない珍しいものを展示しようとする。中国産「孔子鳥」問題の根もそこにあると私は思っている。言葉のニュアンスからか，地域博物館という呼び名は敬遠されがちのようだが，私は地域性こそが博物館の特性だと思っている。しかもただ地域の自然を紹介するだけではなく，「現在の地域自然の在りようや，自然を構成する諸要素のすべてが，自然に依存して営まれてきた人の暮らし・人類社会との相互作用による歴史的所産であり，それを後戻りさせることはできない」と実感し，では「これからどうすればよいのだ」考え込ませるような展示がほしい。博物館にかかわって40年，自分が納得できる展示は未だできたことがないが，たとえできたとしてもそれだけでは十分でない。それは所詮，テレビでみる自然ドキュメンタリーに感動し自然愛好家になったのとあまり変わらない。博物館の展示は自然への入り口なのである。博物館は人々にお説教するのではなく，「地域の自然，それもいつも見慣れた身の回りの自然が，自分たちの命や暮らしにとってかけがいのないものだ」と体感してもらえるように，より多くの人を，より何回も自然の中に誘う努力をしなければならない。自然保護にとって博物館と学芸員の果たす役割は非常に大きい。